

「魅力ある職場づくりプロジェクト」の取り組み

山崎 孝子¹⁾、同 看護部²⁾、同 看護部³⁾、同 看護部⁴⁾、
同 診療部⁵⁾、同 薬剤部⁶⁾、同 検査部⁷⁾、同 放射線科部⁸⁾、
同 リハビリテーション科部⁹⁾、同 医療技術部¹⁰⁾、
同 医療技術部¹¹⁾、同 事務部¹²⁾、同 事務部¹³⁾、同 事務部¹⁴⁾

○二俣 悟^{1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,12,13)}、小椋 史香²⁾、竹田 喜久恵³⁾、友澤 永子⁴⁾、
梅末 正芳⁵⁾、村上 通康⁶⁾、森山 保則⁷⁾、水口 司⁸⁾、高岡 達也⁹⁾、
白石 裕二¹⁰⁾、片山 和子¹¹⁾、武知 浩二¹²⁾、乃万 孝樹¹³⁾、
古瀬 智之¹⁴⁾

【はじめに】当院では「いきいきと働き続けられる」「医療者に選ばれる」「選んでよかったと思える」病院を目指すため、平成25年12月に「魅力ある職場づくりプロジェクト」が発足した。職種全体で「魅力ある職場」の共通認識を持ち、抽出した優先課題に取り組み、一定の成果が得られたので報告する。

【取り組み】1 平成26年度の優先課題を「専門資格取得に対する支援策」とした。2 各職種における専門資格を洗い出し（種類、研修期間、費用等）、「職種別資格取得情報」を作成した。3 各専門資格をランク付けし、病院管理・運営上の必要性A、戦略達成の貢献性B、自己研鑽性Cとし、3区分に分類・精査した。

【結果及び考察】区分Aを、診療報酬請求等に要件の記載があるものをA-1、記載がない・施設認定に必要なものをA-2に明確化した。職種別資格取得情報を「医師」と「医師以外」の2種類に整理した。「医師」は、診療報酬請求や施設認定に影響することが多く、A-1・A-2が多数存在した。「医師以外」は、就職してから取得する資格の種類が多く、A-1・A-2に該当する資格が少数であった。A-1については、部門別研究研修費ではなく病院経費の扱いとすべきであるとの見解に至った。

【結論】各専門資格の洗い出しと優先順位を付けることで、職種間の共通認識がもて「可視化の実現」が図られた。職員にとって満足感・やりがい・公平感が得られるようさらなる資格取得支援の充実を図るため、必要な対策を講じていくことが重要であると示唆された。

0-9-04

新病院における気送管システムの有用性

那須赤十字病院 事務部¹⁾、同 統括管理官²⁾、同 検査部³⁾、同 看護部⁴⁾

○菊地 純一¹⁾、宮原 保之²⁾、杉原 敏夫¹⁾、志村 哲¹⁾、高木 英昭¹⁾、田村 勝幸³⁾、杉江 和明³⁾、高橋 美知子⁴⁾

【はじめに】当院では平成24年7月に新築移転し大田原赤十字病院から那須赤十字病院に名称が変更になりました。新病院建設にあたり、旧病院での物流調査を行い当時の検体搬送における問題点を抽出し、新病院における検体搬送フローや設備計画を行った。今回新病院では、搬送システムとして気送管を採用した。病院移転後2年経過したので検証を行いその報告をする。

【検証方法】1) 気送管システムの搬送履歴から搬送回数の調査
2) 人手搬送した時の時間を実測
3) 気送管システムを使用している看護師にアンケート調査
4) 気送管システムの満足度をヒアリング調査

【成果】気送管システムを用いて検体搬送を行うことは、人手搬送の時間短縮、看護業務の改善がなされた。また、検体を迅速に検査部に搬送できることはとても有用である。

【おわりに】新病院建設において、物流はとても重要な要素であり、コストのかかる設備です。検体物流において導入効果、満足度は大変大きいと考える。今後は、気送子やインナーケースのさらなる改良とよりよいメンテナンスの構築などメーカーとさらなる検討の機会を持ち、今よりも使い勝手のよい搬送システムにしていきたい。

0-9-06

医療機器安全管理責任者の活動報告 ～過去3年間の医療機器研修会の開催実績～

旭川赤十字病院 医療技術部¹⁾、
同 医療技術部 第一・第二臨床工学課²⁾、同 医療技術部 麻酔科³⁾

○脇田 邦彦¹⁾、小野寺 哲兵²⁾、増子 真人²⁾、前田 愛梨²⁾、
黒田 恭介²⁾、細矢 康孝²⁾、白瀬 昌宏²⁾、大田 真人²⁾、
貝沼 宏樹²⁾、佐藤 あゆみ²⁾、奥山 幸典²⁾、飛鳥 和幸²⁾、
陶山 真一²⁾、中木 久美子²⁾、住田 臣造³⁾

【はじめに】当院における過去3年間の研修会の開催実績を報告する。

【対象】2012～2014年度の3年間に於いて新規導入された医療機器や器材の研修会と医療機器安全運用の目的で各部門から依頼があった研修会を対象とした。

【結果】2012年度は研修会開催総数213件で受講者総数3178名、そのうち新規導入機器・器材の研修会は79件、新規デモ機器31件、部門研修80件、全体研修14件、薬剤部や放射線科、検査科、リハビリテーション課など他部門は9件であり、臨床工学技士が講師101件、外部講師112件であった。2013年度は研修会開催総数211件で受講者総数3266名、新規導入の研修会は55件、新規デモ機器35件、部門研修96件、全体研修14件、他部門は11件、臨床工学技士が講師92件、外部講師が119件であった。2014年度は研修会開催総数164件で受講者総数2556名、そのうち新規導入の研修会は58件、新規デモ機器32件、部門研修54件、全体研修12件、他部門は8件であった。臨床工学技士が講師66件、外部講師98件であった。

【考察】研修会の開催件数は毎年約160～200件であった。重要な事は業務多忙の中でいかに時間をつくり、短時間で効果的な研修会を開催できるかにある。

【結語】安全確保のためにすべての新規導入機器・器材の研修会を漏れ無く開催し、そのすべての記録を残すことは医療機器安全管理責任者の重要な責務であり、限られた時間の中で効果的な研修会を開催できるように努力しなければならない。

日赤図書室協議会におけるスケールメリットを活かした文献複写サービス

沖縄赤十字病院 図書室¹⁾、静岡赤十字病院 図書室²⁾、
日本赤十字社和歌山医療センター 図書室³⁾

○久高 千秋¹⁾、天野 いづみ²⁾、鳥淵 早希子³⁾

【はじめに】日赤図書室協議会（会員数63施設、以下協議会）は、図書館司書を中心にした図書室担当者の職能団体である。図書室の業務として、研究や臨床のために必要な資料を職員の要求に対して提供する文献相互利用サービス（Interlibrary Loan：ILL）がある。

【目的・方法】経費削減や価格高騰等の理由から各施設の雑誌の定期購読数には限りがある。そのためILLの需要は多く、図書室の重要な業務となっている。ILLでの文献代金は、1、複写代、2、送料、3、振込手数料を依頼先施設に支払う取り決めであるが協議会では、平成25年12月よりILL無料化を実施したのでまとめを報告する。

【結果】平成26年6月～平成27年1月、無料化参加施設51施設、（調査回答数47施設、未回答数4施設）。協議会依頼4,857件、その他施設への依頼6,718件、赤十字間で42%入手することができる。文献の内訳は、冊子体71%、電子ジャーナル22%、謝絶7%である。負担状況については赤十字間で5,095件、負担金687,223円（文献コピー代、送料）である。

【まとめ】今回、無料化を行った結果、職員の負担金、図書室担当者の振込み業務の手間が軽減できた。アンケート調査からは、今まで以上に協議会の一員という実感がもてるようになったという感想が得られた。一方で受付・申込件数のアンバランスによる負担過多という問題もあるため、受付数上位10施設を公表して、依頼に対して配慮し、赤十字のスケールメリットを活かしたサービスを継続していきたい。

0-9-05

時間外勤務命令書の電子化について

諏訪赤十字病院 総務人事課

○清水 聡¹⁾、原 雅功、仲沢 典丈、濱 英明、北原 咲、土井 実弥美

【はじめに】当院では時間外勤務命令書を紙媒体に手書きで記入しているが、現場で記入する時間や給与システムに入力する時間を考慮すると非常に効率が悪く、そこで時間外勤務命令書を紙ではなく、データ化する事で作業工数を減らすことを目的とした。

【方法】（1）時間外勤務命令書をエクセルにて作成し、各部署にて入力する。（2）入力したデータをエクセル内で集計し、給与システムにて取り込みのできるcsvデータに変換する。（3）総務人事課にてデータを回収し、給与システムに取り込む。

【結果】エクセルにて運用を行ってみると様々な問題が発生した為、以下の様に対応、改善を行った。1）従来の1人1枚方式ではなく、日付別のシートに全員が入力する1日1枚方式に変更。2）データの改ざんを防ぐ為、ロック機能を付け、部門責任者が確認後はパスワードを入力しなければ変更が出来ない仕様にした。3）合計時間だけでは分かりにくい為、個人別の集計シートも作成し、時間外内容も詳細に記録できる仕様にした。4）時間外勤務は本来所属長に事前申告を行い、所属長の許可の元に行われるべきだが、現状は事後報告となっている。ただ入力するだけでは、「ただただ残業」を助長してしまうのではないかと。⇒エクセルシートに事前報告欄を設けて、所属長が事前確認出来る運用に変更した。

【考察、効果】1）1日1枚方式にした事で、1日単位の勤務状況が見やすくなった。又、データ化することで時間外勤務の原因分析が容易となった。2）従来の1枚あたり平均1分かかっていた時間外入力が必要となった。5東病棟であれば1部署あたり約37分、今後病院全体に展開できれば1,031分（約17時間）の工数削減となる。3）時間外勤務の事前申告制度が定着した。

0-9-07

シリンジ・輸液ポンプ更新に伴うMEの取り組み

京都第二赤十字病院 臨床工学課

○白枿 大介、當眞 章吾、田中 宣行、山本 光、野澤 朋寛、
福永 麻香、入江 明日香、田中 健吾、和田 力、小森 直美、
山村 太、市木 也久

【背景】現在、各メーカーから複数のシリンジポンプ、輸液ポンプが各病院向けに販売されている。全国の病院で、故障、老朽化など随時ポンプ更新を行い複数種類のポンプが院内に混在している。当院でも複数種類のポンプが混在していた。

【目的】全病棟での一斉導入となるため、消耗品の説明およびポンプの操作方法の徹底。事前機器点検など、念密な計画が必要となる。今回、我々は『シリンジ・輸液ポンプ』の教育・機器試験を行い円滑に導入した。

【方法】シリンジ、輸液ポンプの納入数か月前にメーカーから取扱説明書を取り寄せ、まずベースとなる「基本操作マニュアル」を作成した。その後新人看護師でも理解できる様編集し、「操作手順書・警報対処法」を作成した。そしてMEスタッフが基本操作マニュアルに沿った実技研修を受け、その後取扱いに慣れた段階で「ME点検マニュアル」を作成した。ポンプ納品後はシリンジ、輸液ポンプ全台ME点検マニュアルに沿った受入れ試験を行った。マニュアル作成と並行で、医師、看護師対象に操作方法・警報対処の勉強会を操作手順書・警報対処法を元に各部署で行った。夜勤者には別日を設けMEセンターで勉強会を実施し、全員が参加できる様に計画を立てた。勉強会終了後試行期間を数か月設けスタッフが慣れた段階で、全台入替えを行った。

【結果】円滑に更新を行うことが出来た。また機種を統一することにより手帳も統一化されスタッフの安心も得られた。

【考察】全台更新を機にスタッフにアンケートを行った結果、結果に示す様な成果も得られたが、更なる看護師への教育、各病棟単位で使用用途に沿ったマニュアルの作成など、これらの改善が今後検討される。